

大和行幸の勅

8月13日、**大和行幸の勅**が渙発された。大和国の**神武天皇陵・春日大社**に行幸、しばらく逗留して親征の軍議をなし、次いで**伊勢神宮**に行幸するということだったが、もとよりこれは天皇の真意に出たものではなく、議奏の三条ら急進派公家や真木が主張したものだった。天皇は憔悴のためろくに寝食も取れない状態となる。行幸の間に御所を焼き払い天皇を長州に迎えるのだとか、横浜の征伐に向かうのだといった風説が流れた。因州・備前・阿波・米沢4侯が参内し、親征中止を天皇に直接述べたいと強く求めた。

同じ日、薩摩の高崎正風（左太郎）が会津藩公用方秋月悌二郎を訪れ協力を求めた。時が無いため、京都の薩摩藩邸は本国からの出兵を待たず、越前に代わる新たな提携相手として会津に接近したのである。その後高崎は近衛忠熙を訪ねて相談したが、近衛は決断を躊躇った。**薩摩と会津は計画を練り**、15日に高崎と秋月が中川宮を訪れて計画を告げると、宮は協力を決断した。16日未明に宮が参内し奏上したものの密談できず、**天皇には計画の概要のみ伝えられたが**、夜になって「**兵力をもって国の災いを除くべし**」と政変を決断する宸翰が宮に伝えられた。17日に京都守護職松平容保から計画を聞いた右大臣二条齐敬が賛同した。内大臣徳大寺公純も同意であった。**近衛忠熙もここで協力を決意**する。そして深夜、中川宮・二条・徳大寺・近衛父子と松平容保・稲葉正邦（京都所司代、淀藩主）が参内し、最終的な相談が行われた。

（ウィキペディア「[八月一八日の政変](#)」）